

「～やー連体形」から終助詞カへの交替 ——天草版『平家物語』に見る交替の諸相——

Change from *Ya* Adnominal form to Final Particle *Ka* Considerations in *The Tale of Heike Printed in Amakusa*

徳 永 辰 通*

1 はじめに

柳田征司(1985)は、『竹取物語』と天草版『伊曾保物語』の疑問表現の形式を比較している。その中で、『竹取物語』において多様であった要判定の疑問表現を表す形式が、天草版『伊曾保物語』では「…カ。」(以下、終助詞カとする。)に取って代わられていることを示している¹⁾。『竹取物語』の要判定の疑問表現は、「問い」を表す形式が「…や…。」「…カ。」、「疑い」を表す形式が「…や…。」「…や。」、「反語」を表す形式が「…や (ハ) …。」「…や (ハ)。」であるという。柳田(1985)の要判定の疑問表現の「問い」「疑い」「反語」のいずれの表現においても「…や…。」が挙げられていることから明らかなように、要判定の疑問表現を表す形式に「～やー連体形」は位置づけられる。つまり、要判定の疑問表現を表す形式は、「～やー連体形」から終助詞カへと交替したと考えられる。

さて、近藤政美(2002)は、『平家物語』〈高野本〉(以下、高野本とする。)と天草版『平家物語』(以下、天草版とする。)の、それぞれの助詞の延べ語数に対する、助詞の各語の使用度数の比率を示している。それによると、「～やー連体形」のいわゆる係助詞やは、高野本と比べ天草版において使用比率は小さくなり、終助詞カの使用比率は天草版において大きくなるという²⁾。そして、天草版の終助詞カは、「原拠本」に近い『平家物語』(高野本など)の終助詞カ、係助詞カ、「その他の語句」と対応しているとし、その中でも「その他の語句」と対応する例が多いという。そして「その他の語句」の中でも特に係助詞やとの対応が多いとしている。これらの点から、原テキストの「～やー連体形」の天草版への取り入れられ方を考察することで「～やー連体形」から終助詞カへの交替について明らかになる点もあると考える³⁾。

*人文学部非常勤講師—日本語学

以下、本稿は天草版への「～ヤー連体形」の取り入れ方を考察し、要判定の疑問表現形式の「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替の特徴を明らかにしていく。

2 考察の前に

本稿は要判定の疑問表現の代表的な形式であった「～ヤー連体形」が、終助詞カへと交替していく様相を、天草版とその原テキストとの比較を通して考察していく。考察は次の手順で進めていく。まず、原テキストの「～ヤー連体形」が天草版においてどのような形式と対応するのかを明らかにする（Ⅰ）。次に原テキストの「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を、成分に焦点をあてて考察する（Ⅱ）。そして最後に「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を文の種類に焦点をあてて考察する（Ⅲ）。

以下、このⅠ～Ⅲの観点で考察する意義について述べる。

Ⅰ 原テキストの「～ヤー連体形」と対応する天草版の形式

神谷栄治（2000）は覚一本系統の『平家物語』と天草版との比較から、要説明の疑問表現と要判定の疑問表現の形式の変容を概観している。それによると、要判定の疑問表現の形式は覚一本において「～ヤー連体形」、「～ヤ。」とが見られ、天草版では一部「～ヤー連体形」も見られるが、終助詞カによって表されることが多くなるという。神谷（2000）の指摘は近藤（2002）の指摘と符合するが、それぞれの形式が実際にどの程度見られるのか、また終助詞カ以外にどのような形式と対応するのかについては明らかにされていない。

この他に、天草版の疑問表現を表す形式を具体的に示したものに清水登（1995）がある。Ⅱで詳しく述べるが、清水（1995）は原テキストと天草版の比較という方法をとるものではない。原テキストと天草版間での対応状況を示すものは管見に入る限りでは見あたらない。

以上のことから、まずは原テキストの「～ヤー連体形」と対応する天草版の形式を具体的に明らかにし、神谷（2000）と近藤（2002）の指摘を確認する。

Ⅱ 「～ヤー連体形」の終助詞カへの交替と文の成分

柳田（1985）は「～ヤー連体形」の衰退を格助詞の明示と関連づけて述べている。また、清水（1995）は疑問表現を「不定方式」と「特定方式」とに分け、さらにそれぞれの方式の疑問表現を「問い」「疑い」「反語」の表現に分け、それぞれの表現を表す形式を整理している⁴⁾。清水（1995）には、天草版の「特定方式」（要判定の疑問表現）の表現形式は「問い」「疑い」「反語」とも終助詞カによるものであることが示されている。そして、「特定方式」の終

助詞カと共起する主格助詞を考察し、主格助詞がガである場合（「～ガーカ」）は「疑い」「反語」を表し、ハである場合（「～ハーカ」）は「問い」を表しているとしている。これまで、柳田（1985）や清水（1995）のように、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を格助詞の明示との関係で述べられることがあった⁵⁾。格助詞の明示との関係で考察するということは、仁田義雄（2002）における「共演成分」との関係で考察するということである。しかし、ヤは「共演成分」以外の成分にも接続するため、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を「共演成分」との関係のみで考察したのでは不十分であろう⁶⁾。そのため、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を、ヤの接続する成分ごとに区別し、その対応の在り方を考察する。

III 「～ヤー連体形」の終助詞カへの交替と文の種類

管見に入る限りでは、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を、文の種類との関係で考察するものは見あたらない。本稿はⅠ、Ⅱの考察を踏まえて「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を、文の種類との関係から考察する。

ここで、本稿の考察対象について触れておく。本稿は、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替の様相を、天草版とその原テキストとを比較し考察するものである。本稿が考察対象とするのは、原テキストと天草版の「～ヤー連体形」である。そしてそれぞれの対応箇所と比較をしていくが、対応箇所を持たないものは考察の対象から除く。また、疑問詞と共起するものも本稿では扱わない。

3 天草版への「～ヤー連体形」の取り入れられ方

3.1 原テキストの「～ヤー連体形」と対応する天草版の形式

原テキストの「～ヤー連体形」が天草版ではどのような形式と対応しているのかを概観する。「～ヤー連体形」は原テキストに185例見られる。それらのうち、天草版に対応箇所が存在するものは90例である。ここでは、この90例の原テキストにおける「～ヤー連体形」が天草版でどのような形式と対応しているのかを概観する。

原テキストの「～ヤー連体形」の天草版における対応の在り方は、次の3種に大別される⁷⁾。

- i, 対訳：原テキストの「～ヤー連体形」が天草版においても踏襲されるもの
- ii, 交替：原テキストの「～ヤー連体形」が天草版において他の疑問を表す形式へと交替されるもの

- iii, 削除：原テキストの「～ヤー連体形」が天草版では削除され、疑問の形式があらわれないもの（疑問を表す形式以外に変形されたものも含む）

天草版に対応箇所を持つ原テキストの「～ヤー連体形」全 90 例の、天草版への取り入れられ方は対訳 23 例、交替 53 例、削除 14 例であり、交替となる用例が半数を超えている。

対訳、交替、削除の他に、原テキストの該当箇所に「～ヤー連体形」は見られないが、天草版で「～ヤー連体形」として取り入れられるもの（これを「変形取入」と呼ぶこととする）が 1 例見られる。この例については 3. 2. 1 で扱う。

以下、対訳、交替、削除となる例を概観する。

対訳（23 例）

対訳される「～ヤー連体形」は 23 例ある（引用の下線は筆者による。一部表記を改めたところもある。また、原テキストの対応箇所が高野本である場合は用例番号の右に「a」を付した。斯道本である場合は「b」を付した。以下同様）。ここでは用例を挙げるにとどめ、ヤの接続する成分の分析は 3. 2. 1 に譲る。

- 1 そば近う添うた武士を誰そと尋ねらるれば、経遠と答へたに：もしこの辺にわが方様の者やある，船に乗らぬ先に言ひ置かうずることがある：尋ねて参らせよと，言はれたれば；… 天草版 54-11
- 1a ちかうそひたる武士を，「たそ」ととひ給へば，「難波次郎経遠」と申。「若此辺に我方さまのものやある。舟に乗らぬ先に言ひおくべき事あり。尋てまいらせよ」との給ひければ，… 高野本 104-7

交替（53 例）

交替される用例は 53 例見える。この 53 例のうち 51 例は天草版で「一カ。」というように終助詞カへと交替されている。

- 2 …貞能つと寄って，なぜにこれほどの御大事に軍兵どもをば召し具せられぬぞと申したれば，大事とは天下の大事をこそ言へ：かやうの私事を大事と言ふことがあるかと言はれたによって，兵仗を帶した者どもも皆そぞろびいて見えた。 天草版 30-13
- 2a …貞能つと参って，「など是程の御大事に，軍兵共をば召しぐせられ候はぬぞ」と申せば，「大事とは天下の大事をこそ言へ。かやうの私事を，大事と云様やある」との給へば，兵杖を帶したる者共も，皆そぞろいてぞ見えける。 高野本 83-13

天草版において終助詞カ以外の疑問形式に交替されているものは次の2例である。

- 3 侍かと存ずれば、錦の直垂を着、また大將かと存ずれば、続く勢もござなかったが、声は板東声でござったと、申したれば：あはれこれは実盛でかあるらう：ただしそれならば身が一年幼な目に見た時に、早白髪が少しあったほどに、…

天草版 171-10

- 3b 侍カト見レハ・錦ノ直垂ヲ着テ候・又大將軍カト思ヘハ・繼ク勢モ候ハス・板東音ニテ候ツルト申セハ・哀レ是レハ齊藤別当実盛ニテヤ有ラン・但ソレナラハ義仲一年ヲサナ目ニ見シカハ既ニ白髪糟尾ナリシソ

斯道本 435-1

- 4 法皇は平家の取り奉って、西国の方へ落ちて行かうずるといふことを内々聞かせられたによつてか、資時といふ人ばかりをお供でひそかに御所を出させられて、鞍馬の方へ御幸なされたれども、誰もこれを知る人がござなかった、

天草版 179-18

- 4b 法皇ハ平家ノ取進テ・西国ノ方ヘ落行ヘシト云コトヲ内ニ聞召テヤ有ケン・右馬頭資時ハカリヲ御共ニテ潜ミ御所ヲ出サセ玉ヒ・鞍馬ノ方ヘ御幸ナル・人・是ヲモ知ラサリケリ

斯道本 451-10

用例3、用例4は文中カへと交替されている。用例3は「～カー連体形」に交替されていると見てよいのか判断しかねる例である。用例4は原テキストの「～ヤー連体形」句が天草版で「理由句+カ」へと句がまるごと交替されている。交替される53例のうち文中カへと交替されている例はこの2例であり、残りの51例は終助詞カへと交替されている。圧倒的多数が終助詞カへと交替されていることから、要判定の疑問表現を表す形式が「～ヤー連体形」から終助詞カへと交替されたことが窺え、2章のIにおける神谷（2000）と近藤（2002）の指摘が確認できる。

削除（14例）

削除される用例は14例見える。

- 5 備中の妹尾と、備前の有木の別所の間は、わづかに五十町に足らぬ所であれば、少將吹き来る風までをも懐しう思ひ：ある時兼康を召してこれより成親卿のござる備前の有木の別所へはいかほどの道ぞと、問はれたれば…

天草版 59-2

- 5a 備中の瀬尾と、備前の有木の別所の間は、纔五十町にたらぬ所なれば、丹波少將、そなたの風もさすがなつかしう思はれけむ、或時兼康を召して、「是より大納言の御渡あんなる備前の有木へや、いか程の道ぞ」ととひ給へば、…

高野本 109-8

- 6 与一これをつかまつらうずることは不定な：射損じてござらば味方の長い傷でござ

- らうず、自余の人に仰せつけられいかしと申せば：… 天草版 336-7
- 6b 与一是ヲ射候ハンコトハ不定二候・射損シテ候物ナラハ御方ノ長キ疵ニテ候ヘシ・
自余ノ人ニモ仰付ラルヘウヤ候ト申セハ… 斯道本 648-4

用例6で原テキストの「自余ノ人ニモ仰付ラルヘウヤ候」が、天草版で「自余の人に仰せつけられいかし」と命令形が現れているように、「～ヤー連体形」の疑問形式を削除しただけでなく、疑問形式以外に変更され天草版に取り入れられているものも見られる。

以上、対訳、交替、削除のそれぞれを簡単に見てきた。用例数の上からは、対訳される用例よりも終助詞カに交替される用例が多く、天草版成立時には「～ヤー連体形」が終助詞カに侵されていることが窺える。それでも対訳される用例も存在することから、天草版成立時には、まだ「～ヤー連体形」も用いられていたと考えられる。

3.2 「～ヤー連体形」の終助詞カへの交替と文の成分

3.2.1 天草版のヤの接続する成分

本節では、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を文の成分との関係から考察する。ここでは天草版の「～ヤー連体形」のヤの接続する成分を明らかにする。本項の考察対象は、対訳の23例に、変形取入の1例を加えた24例である。

天草版のヤが接続する成分は、格成分15例、副詞的修飾成分8例、引用成分1例である。以下、用例を挙げる。

A 格成分（15例）

天草版で格成分に接続するヤ15例のうち、ガ格に接続するものは11例、ニ格に接続するものは3例、ヲ格に接続するものは1例見られる。

①ガ格に接続するヤ（〔ガ格〕＋ヤ）（11例）

天草版で格成分に接続するヤのうち、ガ格に接続するヤは、「N＋ヤ」であるものが7例、「N＋モ＋ヤ」であるものが4例見える。

○「N＋ヤ」（7例）

天草版のガ格に接続するヤのうち、「N＋ヤ」となる7例はいずれも原テキストから受け継いだものである。先に挙げた用例1の他に次のような例も見られる。

- 7 …成親卿全くさやうの儀はごぞない：人の讒言でござらうず：よくよく尋ねさせられいと、陳ぜられたれば：清盛言はせも果たさいで：人やある、人やあると呼ばれ

たれば：貞能がそこへ参つたに：…

天草版 28-12

- 7a 大納言、「まったくさる事候はず。人の讒言にてぞ候らむ。よくよく御尋候へ」と申されければ、入道言はせもはず、「人やある、人やある」と召されければ、貞能参りたり。
高野本 82-2

○「N＋モ＋ヤ」（4例）

天草版のガ格に接続するやで、「N＋モ＋ヤ」として現れる4例のうち3例は原テキストから受け継いだ対訳の例である。残りの1例は用例10であるが、原テキストで「N＋モ」であったのが天草版において「N＋モ＋ヤ」として取り入れられた変形取入の例である。

- 8 法皇は後ろを遙かに御覧じ送られてただ末代こそ心憂けれ、これを限りでまた御覧ぜられぬこともやあらうずるとて、おん涙を流させられたと申す。まことにこれは少将の上にとってはかたじけない儀でござった。
天草版 36-16

- 8a 法皇はうしろを遙に御覧じをくらせ給ひて、「末代こそ心憂けれ。これ限りで又御覧ぜぬ事もやあらんずらん」とて、御涙を流させ給ふぞ忝なき。
高野本 89-5

- 9 重衡笑うてただ今何ごとをか申さう？ 近う切らるることもやあらうと思へば、髪こそ剃りたけれとあれば、この女房帰り参って、このやうを申せば：…

天草版 301-24

- 9b 中将笑テ重衡只今何事ヲカ申スヘキ・近ク切ラルヘキ事モヤ有ント思ヘハ髪コソ剃タケレト宣ハ・此女房帰り参テ此ヤウヲ申セハ…
斯道本 588-1

- 10 重盛なぜにただ今さやうのことがあらうぞと、思はれたれども、今朝の清盛の気色さる物狂はしいこともやあるらうとて、車を飛ばせて西八条へ出でられて、…

天草版 43-21

- 10a …、大臣、争かざる事あるべきと思へ共、今朝の禪門の気色、さる物ぐるはしき事もあるらむとて、車をとばして西八条へぞおはしたる。
高野本 95-5

②二格に接続するヤ（〔二格〕＋ヤ）（3例）

天草版の二格に接続するヤは3例見える。

○「N＋ニ＋ヤ」（2例）

天草版で二格に接続するヤのうち、「N＋ニ＋ヤ」となるものは2例見える。どちらも原テキストからそのまま受け継いだものである。

- 11 行綱近う寄り、小声になって申したは：その儀ではござない、ひたすら御一家の上とこそ承ってござれ。法王も知ろし召されたか？ 子細にや及ぶ：成親卿の軍兵を

集めらるるも院宣とてこそ呼ばせらるれ：…

天草版 22-2

- 11a 行綱ちかうより、小声になって申けるは、「其儀では候はず、一向御一家の御上とこそ承候へ」。「さてそれをば法皇もしろしめされたるか。」「子細にや及び候。成親卿の軍兵召され候も、院宣とてこそ召され候へ」。

高野本 76-3

○「N＋二＋モ＋ヤ」（1例）

天草版で二格に接続するヤのうち、「N＋二＋モ＋ヤ」となるものは1例である。これも原テキストから受け継いだものである。

- 12 三位の中将も通ふ心なれば、都にさこそわれを覚束なう思ふらう：首どもの中には見えねども、水の底にもや沈みつらうと嘆きなどせうほどに、まだこの世に存へたと知らせたうは思はれたれども、…

天草版 287-23

- 12b 三位中將モ通フ心ナレハ都ニサコソ我ヲ覚束ナウ思フラメ・頸トモノ中ニハ見ヘサレトモ水ノ底ニモヤ沈ツラントテ歎ナントモスラン・未此世ニ存エタリト知ラセハヤト思ヘトモ…

斯道本 568-6

③ヲ格に接続するヤ（〔ヲ格〕＋ヤ）（1例）

天草版でヲ格に接続するヤは1例である。

○「N＋モ＋ヤ」（1例）

天草版でヲ格に接続するヤのうち、「N＋モ＋ヤ」となるのは1例である。

- 13 由ない都近い所は又かく憂いこともや聞きませうずらう：暇申すと言うて、嵯峨を出て高野へ上って、清浄心院にこの四五年行なひ澄まいてゐたれば、父の不孝も免れ、…

天草版 309-15

- 13b 由ナキ都近キ処ハ又此ク浮事モヤ聞カン・暇申トテ嵯峨ヲ出テ高野ヘ登リ清浄心院ニ此四五年行澄シテ居タリケレハ父ノ不孝モ免レタリ

斯道本 597-8

B 副詞的修飾成分（8例）

天草版の副詞的修飾成分に接続するヤ8例のうち、言表事態修飾語に接続するものは7例、言表態度修飾語に接続するものは1例見られる。

①言表事態修飾語に接続するヤ（〔言表事態修飾語〕＋ヤ）（7例）

天草版の副詞的修飾成分に接続するヤのうち、「言表事態修飾語＋ヤ」となるものは7例見える。いずれも原テキストから受け継いだものである。

- 14 故郷に留め置きたいとけない者どもがことをのみ明けても、暮れても思ひゐたれば、もの思ふ心が外に著うや見えつらう！ 大臣殿も、二位殿も池の大納言のやうにこの人も二心があるげなとあつて、… 天草版 310-17
- 14b 三位中将宣ケルハ・人ナミナミニ都ヲ出テ西国ヘハ落行シカトモ・只大方ノ恨メシサモサル事ニテ故郷ニ留並シ幼キ者トモカコトラノミ明テモ暮テモ思ヒ居タレハ・物思フ心ノ外ニシルウヤ見エケン・大臣殿モ二位殿モ池ノ大納言ノヤウニ此人モ二心アラントテ・… 斯道本 599-1

②言表態度修飾語に接続するヤ（〔言表態度修飾語〕＋ヤ）（1例）

天草版の副詞的修飾成分に接続するヤのうち、「言表態度修飾語＋ヤ」となるものは1例である。これも原テキストから受け継いだものである。

- 15 平家はここは山も高し、谷も深し、四方は岩石ぢやほどに、搦手へはたやすうよも回るまいと思うて、うち解けたところに、思ひもかけぬ鬨の聲に驚いて、あわて騒いでもしや助かると、側な谷へこけ落つところで、… 天草版 167-19
- 15b 平家ハ此ハ山モ高シ・谷モ深シ・四方岩石ナリ・搦手輒クヨモ廻シテ打解ケタル處ニ思モカケヌ・警テ周騒キ若ヤ助ルト・側ノ谷ヘソ落シケル 斯道本 430-11

C 引用成分に接続するヤ（〔引用成分〕＋ヤ）（1例）

天草版の引用成分に接続するヤは1例である。

○「引用＋ト＋ヤ」（1例）

- 16 …籬の菊の枯れ枯れに移ろふ色を御覧ぜられても、わが身の上とや思し召されつらう。寂光院の傍らに方丈なる御庵室を結ばせられて、… 天草版 373-4
- 16b …菊ノ枯々ニ移ロフ色ヲ御覧シテモ我身ノ上トヤ思召ケン・寂光院ノ傍ニ方丈ナル御庵室ヲ結ハセ玉ヒテ・… 斯道本 735-5

以上、天草版のヤの接続する成分およびその現れ方を概観してきた。まとめると表1のようになる。

格助詞とヤとの関係を見てみると、天草版の「N＋ヤ」形式はガ格に限られることが指摘できる。二格の場合、「N＋ニ＋ヤ」「N＋ニ＋モ＋ヤ」の両形式が見られ、いずれもニが明示されている。その一方でガ格、ヲ格の場合、格助詞は明示されていない。

天草版の「～ヤー連体形」は原テキストからそのまま受け継ぐものがほとんどであるのに対し、わずか1例であるが天草版独自の用例があった。用例10である。原テキストにおいて「今朝の禅門の気色、さる物ぐるはしき事もあるらむ」とあるのを、天草版において「今

表1 天草版のヤの接続する成分とその在り方

ヤの接続する成分	成分の下位タイプ	天草版での在り方
格成分	ガ格	「N＋ヤ」(7例) 「N＋モ＋ヤ」(4例)
	ニ格	「N＋ニ＋ヤ」(2例) 「N＋ニ＋モ＋ヤ」(1例)
	ヲ格	「N＋モ＋ヤ」(1例)
副詞的修飾成分	言表事態修飾語	「言表事態修飾語＋ヤ」(7例)
	言表態度修飾語	「言表態度修飾語＋ヤ」(1例)
引用成分	引用成分	「引用＋ト＋ヤ」(1例)

朝の清盛の気色さる物狂はしいこともやあるらう」と「～ヤ一連体形」として取り入れられている。原テキストで「N＋モ」とあるのを、天草版では「N＋モ＋ヤ」とされ、ヤはガ格に接続している。「N＋モ＋ヤ」はガ格のみならず、ヲ格にも見られる形式である。「モ＋ヤ」で見ると、ガ格、ヲ格に加えニ格にも見られ、「モ＋ヤ」の接続する格成分の範囲の広さが窺える。

3.2.2 天草版の終助詞カ

交替となる53例のうち、原テキストの「～ヤ一連体形」の疑問を表す形式が天草版で終助詞カとなる例は51例であった。ここではこの51例を対象に原テキストのヤの接続する成分を考察する。また、終助詞カへ交替したことにより、ヤの位置が天草版においてどのように対応するかを見ていく。

原テキストにおける「～ヤ一連体形」のヤが接続する成分は、格成分30例、副詞的修飾成分3例、引用成分15例であり、他に「連用形＋テ」に接続するものが3例ある。以下、原テキストのヤの接続する成分を区別し、それぞれが天草版でどのような対応を見せるのかを考察していく。

A 格成分 (30例)

格成分に接続する30例のうち、原テキストにおいてガ格に接続しているものは19例、ニ格に接続しているものは3例、ヲ格に接続しているものは7例、へ格に接続しているものは1例見える。

①ガ格に接続するヤ（〔ガ格〕＋ヤ）(19例)

原テキストでガ格にヤが接続する例は19例見られる。この19例のうち、原テキストの「N＋ヤ一連体形」が天草版で「N＋ガーカ」となるもの15例、「N＋ハーカ」となるもの1例、

構文ごと交替されるものが3例見られる。

○ガ明示（「N＋ヤー連体形」→「N＋ガーカ」）（15例）

交替の用例のうち、天草版でガが明示される用例は15例である。

- 17 清盛頼みきられた重盛はかやうにあれば、力もなげになって、いやいやそれまでは思ひも寄らぬ儀ぢや：悪党どもが申すことにつかせられて僻事などが出で来ようずるかと思ふばかりでこそあれと、言はれたれば：… 天草版 49-5
- 17a 太政入道も、たのみきったる内府はかやうにの給ふ、力もなげにて、「いやいやこれまでは思もよりさうず。悪党共が申事につかせ給ひて、僻事なんどやいでこむすらんと、思ふばかりでこそ候へ」との給へば、… 高野本 100-3
- 18 …たとひ知ってござりとも、侍品の者が申すまじいと思ひきったことをば、糺間によつて申すことがあらうか？ 長兵衛宮のおために首を刎ねられうことは今生の面目、後生の思ひ出ぢやと申して、その後はものを言はなんだ。 天草版 113-11
- 18b 縦ヒ知り奉り候トモ侍品ノ者が申サジト思切ンズルコトヲハ糺間ニ依テ申ヘキヤウヤ候ハン・信連宮の御故ニ首ヲ刎ラレンコトハ・今生ノ面目・冥途ノ思出ニ候ト申メ其後ハ不言… 斯道本 254-11

○ハ明示（「N＋ヤー連体形」→「N＋ハー打消しの助動詞＋カ」）（1例）

交替となる用例のうち、天草版でハが明示される用例は次の1例のみである。

- 19 お使ひをば基康と申したが、船から上がって、ここもとに都から流されさせられた丹波の少将殿や、俊寛御坊、また康頼などはござらぬかと、声々に尋ねたところで、二人の人は例の熊野詣でをして留守で；… 天草版 73-6
- 19a 御使は丹左衛門尉基康といふ者なり。舟よりあがって、「是に都より流され給ひし丹波少将殿、平判官入道殿やおはする」と、声々にぞ尋ける。二人の人々は、例の熊野まうでしてなかりけり。 高野本 141-7

「～ヤー連体形」が「～ハーカ」へと交替される用例はこの用例19のみである。原テキストの用例19aは「平判官入道殿やおはする」であるのが、天草版では「康頼などはござらぬか」と、天草版では打消しの助動詞が見られる。原テキストの「～ヤー連体形」が、天草版で「～ガー打消しの助動詞＋カ」と対応する例は見られないため、打消しの助動詞が現れることとハを明示することに関連があるように考えられるが、用例数がこの1例のみであるため判断はできない。

○構文交替（「事態＋形式名詞＋ヤー連体形」→「事態＋カ」）（3 例）

交替となる用例のうち、天草版で構文ごと交替される用例は 3 例見える。

20 中将義経は情けの深い人で女房などの訴ゆることはいかな大事をも離されぬと承った：姫君大勢ござれば、何か苦しうござらう？ 一人まみえさせられ、親しうなつてこの由を仰せられうずるかと申されたれば；… 天草版 351-20

20b 中将判官ハ情深キ男ニテ・女房ナントノ訴コトハイカナル大事ヲモ放タスト承ル・姫君数マシマセハ何カ苦カルヘキ・一人マミヘサセ親ク成テ此由仰ラルヘウヤ候ラント申レケレハ… 斯道本 676-4

用例 20、用例 20b は事態生起を問う表現である。原テキストで「事態＋形式名詞＋ヤー連体形」であるものが、天草版では「事態＋カ」として取り入れられている。残りの 2 例についても用例 20 と同様に事態生起を問うもので、かつ同様の構文交替がなされている。

②二格に接続するヤ（〔二格〕＋ヤ）（3 例）

○ヤ消去（「N＋二＋ヤー連体形」→「N＋二＋■ーカ」）（3 例）

交替となる用例で、原テキストで二格にヤが接続する用例は 3 例である。いずれも原テキストで「二＋ヤ」とあるのが、天草版では「二＋■」というようにヤが消去されている。

21 少将は今年三にならるる幼い人を持たれたが、日ごろは若い人なれば、君達などのこともさしもこまやかにもなかったれども、今はの時になれば、さすが心にかかったか、この幼い者を今一度見せいと、言はれたれば、… 天草版 57-15

21a 少将は今年三つになり給ふおさなき人を持給へり。日ごろはわかき人にて、君達などの事もさしもこまやかにもおはせざりしか共、今はの時になりしかば、さすが心にやかゝられけん、「此おさなき者を、今一度見ばや」とこそその給ひけれ。

高野本 108-5

③ヲ格に接続するヤ（〔ヲ格〕＋ヤ）（7 例）

交替となる用例で、原テキストでヲ格にヤが接続する用例は 7 例である。

○ヤ消去（「N＋ヲ＋ヤー連体形」→「N＋ヲ＋■ーカ」）（4 例）

交替となる用例で、原テキストでヲ格にヤが接続する 7 例のうち、原テキストの「ヲ＋ヤ」を、天草版でヤを消去して取り入れているものは 4 例見える。

22 …捨て置かせられてなんたる目にかあひまらせうずらうと、口々に申されたれば、

- 三位の入道はそれが心を知られたか：その者は無体に捕られ搦められう者ではない：今見よ参らうずといはるる言葉もまだ乾ぬうちに、… 天草版 120-2
- 22b …既捨置セ玉ヒテイカナル目ニカアイ候イナズトロクニ申セハ入道心ヲヤ知り玉ヒケン・其者ムダイニトラヘカラメラレナントハヨモセシ・今ミヨマイランスルソト宣モハテネハ参リタリ 斯道本 263-1

○ヲ明示（「N＋ヤー連体形」→「N＋ヲーカ」）（1例）

交替となる用例で、原テキストでヲ格にヤが接続する用例7例のうち、原テキストで「N＋ヤ」であるのを、天草版で「N＋ヲ」として取り入れているものが1例見える。

- 23 …もの申さうと言へば：何事ぞと答ゆるに：これは都から流された俊寛といふ人の行方を知ったかと、問ふに：童は見忘れたれども、俊寛はなぜに忘れうぞなれば、これこそそよと言ひもあへず、手に持ったものを投げ捨てて、… 天草版 86-12
- 23a 「物まうさう」と言へば、「何ごと」とこたふ。「是に都より流され給し法勝寺執行御房と申人の、御行ゑや知たる」と問に、童は見忘れたれ共、僧都は争忘るべきなれば、「是こそそよ」と言ひもあへず、手に持てる物をなげ捨て、… 高野本 162-15

○格交替（「N＋ヲ＋ヤー連体形」→「N＋へーカ」）（1例）

交替となる用例で、原テキストでヲ格に接続する7例のうち、原テキストで「N＋ヲ＋ヤ」であるものを、天草版で「N＋へ」というように格を交替しているものが1例見える。

- 24 今は川を渡らうずるでござるが、折節五月雨の頃で水嵩がはるかにまさってござるほどに、渡すほどならば、馬、人、押し流されて失せませうず。淀一口へ向かひませうか？ 河内路へ回りませうかと、申したれば：… 天草版 129-10
- 24b 今ハ河ヲ渡ヘキニテ候カ・折節サミタレノ比ニテ水カサ遙ニマサリテ候・渡スホトニテハ・馬人推流サレ失ナズ・淀芋洗ヘヤ向ヒ候ヘキ・河内路ヲヤ廻リ候ヘキト申セハ… 斯道本 279-9

○構文変更（「N＋ヤー連体形」→「N＋ガーカ」）（1例）

原テキストにおいてヲ格にヤが接続し、「御行方」を「知りたる」かどうかを問うものであるのが、天草版では「行方を知った人があるか」どうかを問うものへと変更されている。このように、原テキストでヲ格に接続するヤには、天草版で文を変更して終助詞カへと交替されたものも1例ではあるが見られる。

25 …、もの申さうと言へば、何事ぞと答へた。ここに都から流されさせられた法勝寺の執行御坊と申す人の行方を知った人があるかと、問へば：… 天草版 85-1

25a …「物まうさう」と言へば、「何事」とこたふ。「是に都より流され給し法勝寺執行御房と申人の、御行方や知りたる」と問うに、… 高野本 161-13

④へ格に接続するヤ（〔へ格〕＋ヤ）（1 例）

○ヤ消去（「N＋へ＋ヤー連体形」→「N＋へ＋■ーカ」）（1 例）

へ格に接続するヤは、用例 24 の「ゝ」部の 1 例のみである。用例 24 では原テキストにおいて「へ＋ヤ」であるのが、終助詞カへと交替することによりヤは消去されている。

B 副詞的修飾成分（3 例）

言表事態修飾語に接続するヤ（〔言表事態修飾語〕＋ヤ）（3 例）

○ヤ消去（「言表事態修飾語＋ヤー連体形」→「言表事態修飾語＋■ーカ」）

原テキストにおいて副詞的修飾成分に接続するヤは 3 例見える。その 3 例とも、用例 26 のように、終助詞カへと交替することに伴い、ヤが消去されている。

26 …帰り上らるる平家は一人もなかつたによつて、さすがに心細う思うたか、源氏の馬の蹄にはかかるまいと言うて、重盛の墓を掘り起こいて、… 天草版 192-7

26b …坂シ入り玉フ平家一人モマシマササリケレハ・有声ニ心細ウヤ思ヒケン・源氏ノ馬ノ蹄ニカカラジトテ小松殿ノ墓掘起シ… 斯道本 468-4

C 引用成分（15 例）

引用成分に接続するヤ（〔引用成分〕＋ヤ）（15 例）

○ヤ消去（「引用成分＋ヤー連体形」→「引用成分＋■ーカ」）

原テキストで引用成分に接続する 15 例すべてのヤは、天草版では終助詞カへの交替に伴い消去されている。

27 さてあらうずることでもなければ、今はかうぢやと言うて、出づるが、なからうずる後の忘れ形見にと思うたか、障子に泣く泣く一首の歌を書いた。 天草版 97-23

27a 扱もあるべき事ならねば、祇王すでに、今はかうとて出けるが、なからん跡の、忘れがたみにもとや思ひけむ、障子になくなく一首の歌をぞかきつけける。

高野本 21-3

D 連用形＋テ（3 例）

①〔形容詞連用形＋テ〕に接続するヤ（〔形容詞連用形＋テ〕＋ヤ）（2 例）

○ヤ消去（「形容詞連用形+テ+ヤー連体形」→「形容詞連用形+テ+■一カ」）

交替となる用例で、原テキストにおいて「形容詞連用形+テ」に接続するヤは2例見えるが、天草版において終助詞カへの交替に伴い、いずれもヤが消去されている。

28 …茅野の太郎もつともさ言はれた、各々かの手を尋ぬることはそれがしが弟茅野の七郎その手にあると聞いた、信濃にそれがしが子ども二人ゐまする：彼らがあつばれわが父はようて死んだか、悪しうて死んだかなどと思はうずる所が不便なれば、弟の七郎が見る前で、…
天草版 250-8, 250-8

28b …千野太郎尤左云ワレタリ・殿原彼手ヲ尋ルコトハ光弘カ弟千野七郎其手ニ有ト聞ク・信濃ニ光弘カ子トモ二人アリ・彼ホカアツハレ我父ハ吉テヤ死タリケン・悪ウテヤ死タリケンナント思ハン所不便ナレハ弟ノ七郎カ見ン前ニテ…
斯道本 501-11, 502-1

②〔動詞連用形+テ〕に接続するヤ（〔動詞連用形+テ〕+ヤ）（1例）

○ヤ消去「動詞連用形+テ+ヤー連体形」→「動詞連用形+テ+■一カ」

交替となる用例で、原テキストにおいて「動詞連用形+テ」に接続するヤは、天草版において終助詞カへの交替に伴い、ヤが消去されている。

29 ここで佐々木を待ちかけ引っ組んで落ち、刺し違へ、鎌倉殿に損取らせ奉らうずるものをもと思ひきつて、待つところに、佐々木の四郎何心もなう歩ませ来る。押し並べて組まうか、向うさまに当て落とさうかなどと思ひ煩ふが、…
天草版 232-14

29b 爰ニテ佐々木待カケ・引組テ落・サシチカヘ・鎌倉殿ニ損トラセ奉ンスル物ヲ思切テ待処ニ佐々木四郎何心モナク歩セ来ル・推並テヤ組ン・向フサマニヤアテ落サンス・ナント思ヒ煩フ
斯道本 481-8

ここで、原テキストのヤの接続する成分と、天草版の終助詞カへの交替による対応の在り方を表に示すと次の表2のようになる。

原テキストの「～ヤー連体形」が天草版で終助詞カに交替される場合、対応の在り方が多様なのは、原テキストのヤが格成分のガ格、ヲ格に接続する場合である。その一方、二格、へ格、副詞的修飾成分、引用成分、「連用形+テ」に接続する原テキストのヤは、終助詞カへの交替に伴い消去され、対応の在り方は画一的である。

天草版で終助詞カへ交替される場合、「事態+カ」へと構文交替される場合を除くと格助詞が明示される。終助詞カへの交替に並行して格助詞の明示化が進んでいることが窺える。原テキストにおいてヤがガ格に接続する場合、対応の在り方は、ガの明示、「N+ハ一打消しの助動詞+カ」、「事態+カ」の構文交替とがある。「N+ヤ」を「N+ガ」へと格助詞を

表 2 原テキストのヤの接続する成分と、天草版での終助詞カへの交替に伴う在り方

接続成分		原テキストの形式	天草版での在り方
格成分	ガ格	「N + ヤー連体形」	「N + ガーカ」(ガ明示) 15 例 「N + ハー打消しの助動詞 + カ」(ハ明示) 1 例…※ i 「事態 + カ」(構文交替) 3 例…※ ii
	ニ格	「N + ニ + ヤー連体形」	「N + ニーカ」(ヤ消去) 3 例
	ヲ格	「N + ヲ + ヤー連体形」	「N + ヲーカ」(ヤ消去) 4 例 「N + ヘーカ」(格交替) 1 例…※ iii
		「N + ヤー連体形」	「N + ヲーカ」(ヲ明示) 1 例 「N + ガーカ」(構文変更) 1 例…※ iv
	ヘ格	「N + ヘ + ヤー連体形」	「N + ヘーカ」(ヤ消去) 1 例
副詞的修飾成分		「言表事態修飾語 + ヤー連体形」	「言表事態修飾語ーカ」(ヤ消去) 3 例
引用成分		「引用成分 + ヤー連体形」	「引用成分ーカ」(ヤ消去) 15 例
連用形 + テ	「形容詞連用形 + テ + ヤー連体形」		「形容詞連用形 + テーカ」(ヤ消去) 2 例
	「動詞連用形 + テ + ヤー連体形」		「動詞連用形 + テーカ」(ヤ消去) 1 例

明示するのは、用例数の多さから見ても一般的な対応の在り方であるといえよう。一方、「N + ヤ」を「N + ハー打消しの助動詞 + カ」として取り入れる用例 19, 「事態 + カ」へと構文を交替して取り入れる用例 20 のような対応の在り方は一般的な対応に洩れる例と位置づけられる。

原テキストにおいてヤがヲ格に接続する場合、ヤを消去したり、ヲを明示するなどして「N + ヲーカ」として天草版に取り入れるのが一般的な対応の在り方であると考えられる。格を交替し「N + ヘーカ」として取り入れられる用例 24 と、構文を変更し「N + ガーカ」として取り入れられる用例 25 は、一般的な対応に洩れる例といえよう。

以上、原テキストで格成分に接続するヤの天草版における対応をまとめると、原テキストにおいて格成分に接続するヤは、「N + [■ / ニ / ヲ / ヘ] + ヤ」として現れ、それが天草版においては「N + [ガ / ニ / ヲ / ヘ] ーカ」として取り入れられるのが一般的な対応といえる。この一般的な対応に洩れる〈表 2〉の※ i, ※ ii, ※ iii, ※ iv が対応を多様化している。

3.3 終助詞カへの交替と成分の関係

「～ヤー連体形」の終助詞カへの交替と成分との関係を表 1, 表 2 を比較して考察していくこととする。

まず、天草版のヤは、原テキストと同様にガ格、ニ格、ヲ格、副詞的修飾成分、引用成分に接続している。一方、原テキストで接続していたヘ格および「連用形 + テ」に、天草版のヤは接続しない。このことから、原テキストと比べ、天草版のヤの接続する成分の範囲が狭

まっていることを指摘できる。

原テキストにおいても天草版においてもガ格、ニ格、ヲ格、副詞的修飾成分、引用成分にヤが接続していたため、これらの成分へのヤの接続が、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替に関わっているとは考えられない。一方、天草版でヤが接続していなかったヘ格と「連用形+テ」については、これらの成分にヤが接続しなくなったことと、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替とが関連している可能性が残る。つまり、ヘ格と「連用形+テ」にヤが接続しなくなったために、「～ヤー連体形」ではなく終助詞カを用いるようになった可能性があるのである。そのため、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を考える際に、少なくともヘ格と「連用形+テ」については、これらの成分へのヤの接続を考慮する必要があるだろう。

4 終助詞カへの交替と文種の関係

3章で見てきたが、天草版でヤは広い成分に接続していた。本章では、ヤから終助詞カへの交替を、文の種類という観点から考察し、ヤから終助詞カへの交替における文の種類の特徴を抽出する。

表2において対応の在り方を多様にしていたもののうち、※iiiについてはヘ格へのヤの接続を考慮する必要があった。そのため、表2の※i、※ii、※ivのような特殊な対応をするものを手掛かりに、終助詞カへの交替と文の種類の間を考察していくこととする。

対応が特殊な例として挙げられる、唯一の変形取入の用例10から見てみたい。

- 10 重盛なぜにただ今さやうのことがあらうぞと、思はれたれども、今朝の清盛の気色さる物狂はしいこともやあるらうとて、車を飛ばせて西八条へ出でられて、…

天草版 43-21

- 10a …、大臣、争かざる事あるべきと思へ共、今朝の禅門の気色、さる物ぐるはしき事もあるらむとて、車をとばして西八条へぞおはしたる。

高野本 95-5

用例10は「さる物狂はしい」事態の生起を問うものである。このような事態の生起を問う文を、ここではひとまず事態生起疑問文と呼ぶこととする。事態生起疑問文は用例8、9のように対訳される用例も見られ、また次の例のように終助詞カへと交替されて天草版に取り入れられる例も見られる。

- 30 …今一度重盛に会ひ奉りたいと、言はれたれども、それもかなはなんだによつて、たとひ重科を蒙つて遠国へ行く者とても、人一人身にそへぬ事があるかと言うて、

車のうちでかきくどかれたれば、守護の武士どもも皆鎧の袖をぬらいてござる。

天草版 53-16

- 30a 「今一度小松殿に見え奉らばや」との給へども、それもかなはず。「縦重科を蒙って遠国へゆく者も、人一人身にそへぬ者やある」と、車のうちにてかきくどかれければ、守護の武士共も、皆鎧の袖をぞぬらしける。

高野本 103-10

この他、事態生起疑問文は、原テキストの「事態＋形式名詞＋ヤー連体形」が、「事態＋カ」というように構文を変えて天草版に取り入れられており、特殊な対応をする用例（表2の※ii。用例20）にも見られる。さらに、次のような用例も見られる。

- 31 …：もし餓鬼道に尋ねて来たかと思ふほどに、かれもこれも次第に歩み近づく。もしこのやうな者もわが主のおん行方を知ることやあらうかともの申さうと言へば：何事ぞと答ゆるに：…

天草版 86-9

- 31a 「…、われ餓鬼道に迷来るか」と思ふ程に、かれも是も次第にあゆみちかづく。もしか様のものも、わが主の御ゆくゑ知たる事やあらんと、「物まうさう」と言へば、「何事」とこたふ。

高野本 162-13

用例31は、原テキストで「～ヤー連体形」であるのに天草版において「～ヤーカ」として取り入れられている。「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替の在り方を原テキストと天草版との間で観察すると、事態生起疑問文が多様な対応関係にあることが指摘できる。

これらの事態生起疑問文の他に、特殊な対応をするものに用例19（表2※i）があった。原テキストにおいてガ格に接続するやは、交替する場合、天草版において「～ガーカ」と格助詞ガを明示するのが一般的な対応であった。そのような中で、用例19は唯一「～ハー打消しの助動詞＋カ」として天草版に取り入れられていた。用例19をもう一度見てみよう。

- 19 お使ひをば基康と申したが、船から上がって、ここもとに都から流されさせられた丹波の少将殿や、俊寛御坊、また康頼などはござらぬかと、声々に尋ねたところで、二人の人は例の熊野詣でをして留守で；…

天草版 73-6

- 19a 御使は丹左衛門尉基康といふ者なり。舟よりあがって、「是に都より流され給ひし丹波少将殿、平判官入道殿やおはする」と、声々にぞ尋ける。二人の人々は、例の熊野まうでしてなかりけり。

高野本 141-7

用例19は、「丹波の少将殿や、俊寛御坊、また康頼など」の存在を問う文である。このような、人や物の存在を問う文をここでは存在疑問文と呼ぶこととする。存在疑問文は、次のようにガ格が明示されて交替されるものも見える。

32 兵どもこれは聞こゆる悪所ぢや：敵に会うてこそ死にたけれ、悪所に落ちて、死なうずるは、むげなことかな！あはれ案内を知った者があるかと口々に申す所で；平山進み出て申したは：… 天草版 258-22

32b 兵トモ是ハ聞ユル悪所ニテアリ・敵ニ逢テコソ死ニタケレ・悪処ニ落テ死タランハムゲノコト哉・哀レ案内知タル者ヤアルト口々ニ申ス所ニ平山武者所季重進出テ申シケルハ… 斯道本 519-5

この他、存在疑問文は用例 25 のように、原テキストでヲ格に接続する「N＋ヤ一連体形」を、天草版で「N＋ガーカ」というように、構文を変更して天草版に取り入れられたり（表 2 の※iv）、用例 1、用例 7 のように対訳されたりもし、事態生起疑問文と同様に、その対応の在り方は多様である。

事態生起疑問文と存在疑問文の原テキストと天草版での対応の在り方を整理すると次の表 3 のようになる。

表 3 事態生起疑問文と存在疑問文の対応の在り方

	対応の在り方 原テキスト → 天草版
事態生起疑問文	対訳「事態＋形式名詞＋モ＋ヤ一連体形」→「事態＋形式名詞＋モ＋ヤ一連体形」 取入「事態＋形式名詞＋モ一」→「事態＋形式名詞＋モ＋ヤ一連体形」 交替 ガ明示「事態＋形式名詞＋ヤ一連体形」→「事態＋形式名詞＋ガーカ」 構文交替「事態＋形式名詞＋ヤ一連体形」→「事態＋カ」…※ii 「～ヤ一カ」「事態＋形式名詞＋モ一」→「事態＋形式名詞＋モ＋ヤ一カ」
存在疑問文	対訳「N＋ヤ一連体形」→「N＋ヤ一連体形」 交替 ガ明示「N＋ヤ一連体形」→「N＋ガーカ」 ハ明示「N＋ヤ一連体形」→「N＋ハ一打消しの助動詞＋カ」…※i 構文変更（ヲ格）「N＋ヤ一連体形」→「N＋ガーカ」…※iv

表 2 の特殊な対応をする※i、※ii、※iii、※ivのうち、※iiiはへ格へのヤの接続を考慮する必要があった。この※iiiを除くと、文の成分レベルでの考察において特殊な対応をしているものは事態生起疑問文（※ii）と存在疑問文（※i、※iv）である。つまり、「～ヤ一連体形」から終助詞カへの交替における文の成分レベルでの多様な対応の在り方は、事態生起疑問文や存在疑問文という文のレベルでの多様な対応の在り方を反映したものなのである。

「～ヤ一連体形」から終助詞カへの交替が多様な対応をしていた事態生起疑問文と存在疑問文であるが、両者には共通する点がある。それはどちらも述語に存在詞をとる点、つまり存在詞疑問文であるという点である。これまで挙げた事態生起疑問文と存在疑問文のうち、用例 20 の天草版の用例と、用例 25a のみが存在詞疑問文ではない。しかし、それらに対応

する用例 20b と用例 25 の天草版の用例は存在詞疑問文である。このことから、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替における多様な対応の在り方は、事態生起疑問文や存在疑問文という存在詞疑問文の多様な対応の在り方を反映したものである、と言い換えられよう。対応の在り方が多様であるということは、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替が、事態生起疑問文と存在疑問文の存在詞疑問文において単純ではなかったということである。

5 おわりに

本稿は「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替を、天草版と原テキストを比較し、その在り方を記述してきた。以下、明らかにした点をまとめる。

まず、原テキストの「～ヤー連体形」が他の疑問形式へと交替する場合、終助詞カがほとんどであった。このことから、「～ヤー連体形」は終助詞カへと取って代わられたと考えられる。

次に、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替の様相を文の成分レベルで考察した。その結果、原テキストで格成分に接続するやは「N + [■/ニ/ヲ/へ] + ヤ」として現れ、それが天草版においては「N + [ガ/ニ/ヲ/へ] ーカ」として取り入れられるのが一般的な対応と考えられた。この一般的な対応に洩れる用例は、原テキストでガ格とヲ格に接続する「～ヤー連体形」であった。

文の成分レベルにおける、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替の特徴を踏まえ、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替の特徴を文レベルで考察した。その結果、文の成分レベルの考察で得られた一般的な対応に洩れる用例は、事態生起疑問文と存在疑問文であることが明らかになった。事態生起疑問文と存在疑問文はいずれも述語に存在詞をとる存在詞疑問文であった。文の成分レベルにおける多様な対応の在り方は、文レベルである存在詞疑問文（事態生起疑問文・存在疑問文）の対応の多様さが反映されたものであった。対応が多様であるということは、存在詞疑問文（事態生起疑問文・存在疑問文）において、「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替は単純なものでなく、複雑な過程を経たことを物語っている。なお、徳永辰通（2009・b）で、存在疑問文における「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替の過程について概観したが、これは本稿に基づいたものである。今後、存在詞疑問文における「～ヤー連体形」から終助詞カへの交替の過程を明らかにしていきたい。

注

- 1) 柳田（1985）の 128, 129 頁の「表 11」参照。

- 2) 近藤 (2002) によると、「や (係助)」の使用比率は高野本で 6.06%, 天草版では 1.27% である。「か (終助)」の使用比率は高野本で 2.03%, 天草版で 8.00% である。「や (係助)」と「か (終助)」の使用比率が高野本と天草版において反比例している。
- 3) 近藤政美 (1999) に倣い高野本巻第一～巻第三, 斯道本巻第四～巻第七, 巻第九～巻第十二を「原テキスト」とする。欠本である巻第八に国会図書館本を用いた研究もあるが, 本稿は用いない。なお, 本稿で扱ったテキストは次の通りである。
- 天草版『平家物語』: 近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ共編 (1999) 『天草版平家物語語彙用例総索引 (1)』勉誠出版
- 高野本: 新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店
- 斯道本: 斯道文庫編『百二十句本平家物語』汲古書院
- 4) 「特定方式」は要判定の疑問表現に相当し, 「不定方式」は要説明の疑問表現に相当する。疑問表現の形式を「特定方式」と「不定方式」とに分類することを山口堯二 (1990) が提起している。
- 5) 山田昌裕 (2005) は疑問表現における主格「ガ」の活動領域が拡大していく様相を記述している。
- 6) コソについてであるが, 徳永辰通 (2009・a) は, 天草版における「副詞的修飾成分+コソ」の副詞的修飾成分は言表態度修飾語に限られ, 言表事態修飾語にはコソが接続しないことを明らかにした。このことから, 係助詞の考察は共演成分以外の成分も視野に入れる必要があると思われる。
- 7) 安達隆一 (1999) は, 天草版と原テキストのコソの対応関係を大きく対訳, 交替, 挿入, 削除の四種に分類している。本稿は安達 (1999) を参考に再分類した。

参考文献

- 安達隆一 (1999) 「不干ハビアンと『天草版平家物語』—『コソ』の行方」『ことばと文学と書: 春日正三先生古稀記念論文集』双文社出版, 36-51 頁。
- 神谷栄治 (2000) 「中世における疑問表現について」『国文学』(関西大学) 第 80 号, 72-82 頁。
- 近藤政美 (1999) 「天草版『平家物語』の翻字に関する諸問題」『天草版平家物語語彙用例総索引 (1)』勉誠出版, 1-18 頁。
- 近藤政美 (2002) 「天草版『平家物語』における助詞の基幹語彙について—『平家物語』〈高野本〉との比較を中心に—」『岐阜聖徳学園大学紀要』第 41 集, 93-113 頁。
- 清水登 (1995) 「疑問表現について—院政期から室町期までの表現と主格助詞の用法をめぐって—」『長野県短期大学紀要』第 50 号, 183-194 頁。
- 徳永辰通 (2009・a) 「天草版『平家物語』における『副詞的修飾成分+コソ』と『コソー已然形』—『コソー已然形』固定化の一側面—」『上越教育大学国語研究』第 23 号, 79-66 頁。
- 徳永辰通 (2009・b) 「存在疑問文の変遷—疑問形式と存在確認対象と助詞」『解釈』第 55 巻 11・12 号, 26-35 頁。
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版。
- 柳田征司 (1985) 『室町時代の国語』東京堂出版。
- 山口堯二 (1990) 『日本語疑問表現通史』明治書院。
- 山田昌裕 (2005) 「疑問表現における主格表示『ガ』拡大の様相—係助詞『ヤ』『カ』との関わり—」『国語と国文学』第 82 巻 11 号, 57-69 頁。

(2009 年 10 月 18 日受理)